MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２４．９．５　発行元
第 602 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

最近出た本の中から

最近出版された本の中から四冊を取り上げてみることにする。今回は新人作家のこじんまりした作品というよりは、実力作家の注目すべき人気作品を紹介する形になった。結城真一郎の作品が特にお薦めか。

新刊の出版スピードやや回復

３月から５月にかけて書店の文芸書のコーナーが隙間だらけになっていたのだが、ここにきてやや回復傾向。「書店に本がない」状態はちょっと困るし寂しい。新しい本が並んでいると嬉しくなる。

ミステリ分野の単行本はまだ回復途中。平台に並んでいる本の顔ぶれに大きな変化はない。『変な家』シリーズの三冊プラス東野圭吾が相変わらずである。夏休み前に違った作品が並んでくれることを期待している。（この文を書いているのは７月中旬なので…）

今回取り上げた四冊。知念は児童書なので小粒。麻見は平凡。松岡は前作ほどの面白さはなかった。歴史の中にホームズを配置はしてみたものの、ミステリとしての「謎」は十分に作り切れなかった…。

結城真一郎の『難問の多い料理店』が一番のお薦めだろう。ただ『＃真相を…』ほどの盛り上がりが作れたかというとややもの足りない。ベストセラーになった作品の次作は思いの外難しいものだ。

結城真一郎『難問の多い料理店』

６月に集英社から出た本。前作『＃真相をお話します』が好評でベストセラーになったので、今回も期待して読み始めた。

本作の最も目を引く点は「ゴーストレストラン」の設定。いくつもの料理店名を名乗り、テイクアウト専門で、ビーバーイーツによって宅配される形式。その店の怪しげなオーナーシェフが謎解きの注文も受けていて、料理を運ぶ配達員が情報を集めてくるという流れ。六話収録されていて、配達員は毎回変更になる。警察による事件捜査ではないので、曖昧さや疑問を残したままの展開が特徴。登場人物の疑わしき行動をどう解釈していくかがポイントで、そこが「新感覚」と言えるかも…。

知念実希人『放課後ミステリクラブ4』

６月にライツ社から出た本。児童書。シリーズ四作目になる。副題は『密室のウサギ小屋事件』。本屋大賞の候補になってからこのシリーズの存在感が増した。どの書店でも目立つ場所に並べられるようになった。

今回は副題に示してあるように密室の問題。放課後、学校のウサギ小屋からウサギのユキコが消えた。当番の児童と担任が掃除や餌やりを終えた後、鍵のかかった小屋の中から消えてしまった。事件の解決をゆだねられたミステリクラブの柚木陸、辻堂天馬、神山美鈴の三人のメンバーは状況を調査し、密室の謎に挑む。密室にはいろいろなパターンがあり、本文の中でも分析が述べられている。さて、今回はどの方式によるものなのか。いつもながらに「読者への挑戦」も入っている。

麻見和史『殺意の輪郭』

６月に朝日文庫から出た本。副題は『猟奇殺人捜査ファイル』。web 版トリッパーが初出の新シリーズになる。深川警察署の尾崎刑事の視点で描かれ、相棒の女性刑事・広瀬とのコンビが捜査を進める形になる。最初はギクシャク。

第一の現場は廃屋の土中から発見された男の死体。土の中なのに溺死の状態だった。犯人らしき人物からの通報があったようだ。ここから連続殺人に発展し、犯人との頭脳戦のようになる。事件を繋いでいるものは何か。過去の事件が背景になっているようなのだ。麻見作品としては平均的な仕上がりで、それほど目立った特色があるわけではない。今後の展開次第。

松岡圭祐『続シャーロック・ホームズ対伊藤博文』

６月に角川文庫から出た本。２０１７年に出た『シャーロック・ホームズ対伊藤博文』の続編になる。今回はホームズが探偵業から引退して、サセックスで養蜂業をしながら隠遁生活を送るようになってからの出来事。久しぶりにロンドンから訪ねてきたワトソンと会話しているところに電報が届く。「伊藤博文死す」。前作からの流れで伊藤博文と交流のあったホームズとワトソンは葬儀に出たいと思ったが、船便しかない時代で到底無理だった。しばらくしてホームズが兄のマイクロフトを訪ねると、日本から「伊藤博文惜別の会」の招待状が来ていることを知らされた。そして、出口で見知らぬ女性から木製の仏像を手渡され、その背には「伊藤博文を殺したのは安重根ではない」と記されていた。ホームズとワトソンは日本への旅に出る。

時は日露戦争後で、日英同盟が結ばれた直後。ドイツの不穏な動きがやがて第一次世界大戦へと繋がっていく時期。「惜別の会」に集まってくる各国の要人たちの動きがストーリーに大きく関わってくる。